

国際協力拠点としての大学

国際協力は国境のない信頼関係の構築から

カンボジアに本部を置くアジア人材養成研究センター

石澤良昭 上智大学アジア人材養成研究センター所長・教授

一 国際協力の哲学は

「カンボジア人による、

カンボジアのための、

カンボジアの遺跡保存修復」

カンボジアでは生きる喜びに満ちあふれているを感じる。貧しいのになぜなのか。それは人々の心が満たされ、人間の本来の考え方が健全に機能し、巨大な自然とまっすぐ向き合って暮らし、それぞれの生活の中で満足を覚えているという当たり前のことである。その心のよりどころは仏教であり、それにより精神の平安を得ている人々である。

そのカンボジア西北部のシエムリアップ市郊外には、世界的に有名なアンコール・ワットをはじめ、主要な遺跡六十二カ所があり、ちょうど東京二十三区ほどの広さである。そこは九世紀から約五百五十年にわたりアンコール王朝の首都で、各時代の王が造営した石造の寺院や僧院、橋などの大遺跡が集中してみられる。一九九二年に世界遺産に登録された。

上智大学アンコール遺跡国際調査団（以下、調査団と略）は、前記を国際協力の哲学に掲げ、一九八〇年以来カンボジア王国政府と協力し、中・長期計画に基づく自前発掘・自前修復・自国研究ができるカンボジア人専門家の養成を目標としてきた。二〇〇三年十二月には第四十次調査団を派

遣し、カンボジア人保存官候補者や石工の現地実習を続けている。調査団の主な活動分野は、建築、地質、考古、水環境、森林、村落社会、民話・伝統文化、遠隔地遺跡などである。

調査団の調査研究・人材養成に協力いただいている機関は、ユネスコ、フランス極東学院、カンボジアの二省庁と二大学、日本のハ大学と五機関・会社などである。

二 アジアの「知」の遺産を学ぶ

アジア人材養成研究センター（以下、センターと略）がシエムリアップに建設されてすでに九年の歳月が流れた。センターの建設には、朝日新聞社を中心とした百四人の皆様より浄財をご寄附いただいた。受託者は上智大学である。センターには日本人臨時嘱託職員二人が配置され、日常業務及び人材養成プロジェクトを統轄している。センターは二階建てで、約二百九十平方メートルの広さがある。二階に宿泊室九室、一階には建築・考古の研究室がある。

センターの目標は、第一はアンコール遺跡を合むアジアの文化遺産の保存と研究の活動を通じて、その土地の過去と現在と未来を結んで人間の営みをとらえ、遺跡に塗り込められた往時の人々のメッセージを学ぶことである。

第二は、文化遺産の周辺で生活している

村人たちの伝統文化を学んでいる。つまり、農村調査や自然環境調査を通じて、熱帯アジアにおいて機能している生活の「知」を学ぶことである。

第三は、アジアの研究者と協働してプロジェクトを立ち上げ、深い歴史的認識を背景としたアジアの地域固有性を再検証し、グローバル・イッシュュー（世界的問題）と地域社会の相関関係を学び、アジアの現場から観測しながら発信し、受信し、それら情報を蓄積していくことである。

三 建学の精神をアジアで実践

センターには教育・研究・国際交流・広報の四部門が置かれている。

教育活動の拠点として 当分の間、カンボジア人保存官及び石工の養成プログラムを実施する。二〇〇二年夏からは、本は学大学院地域研究専攻のフィールド・スタディーズ科目の講義が開講され、出席者は現地で大学の単位が取得ができる。

調査研究の拠点として センターでは、日本・アセアン諸国の大学院学生・ポスドク、若手研究者を受け入れ、現地調査・研究の便宜を供与している。センターには多くの修復現場写真・図面・設計図が保管され、これら資料が公開されている。大学院学生が論文作成のため、いつも数人潜在している。

国際交流の拠点として 近隣の住民及び小学校生徒を対象に発掘・修復現場の説明会を開催している。また、陶磁器の水洗い体験や仏像・出土品の検分のため、年間約九百人（二〇〇三年）の来訪者がある。国際交流を兼ねるシンポジウムとして、二〇〇四年三月には二十一世紀COE国際シンポジウム「文化遺産とアイデンティティとIT（情報技術）」を開催し、アセアン五力国、米・仏・英ほか十二カ国から約

八十人（延べ人数約二百四十人）が集まり、三日間討論を行った。講演、セミナー、ワークショップも開催してきた。

広報活動の拠点として 遺跡の考古発掘やアンコール・ワット西参道の修復活動の成果、シンポジウム、研究会の案内などをカンボジアから世界へ向けて発信している。

センターは上智大学二十一世紀COEプログラム「地域立脚型グローバル・スタディーズ」の海外教育拠点でもある。

四 現地の研究拠点は

アジア発信局の役割を果たす

センターは現在のところ、種々の情報の受信と発信、蓄積の機能をもち、ネットワークで全世界と結ばれている。これまでの日本のアジア研究は、現地の研究拠点をもちたいまま推進されてきた。天文台をもたない天文学研究のようなものである。現在、民族・人口・食糧・環境などのグローバル・イッシュューが叫ばれている中で、センターは地域における持続的な調査研究を実施する定点観測所である。地域に立脚しながら、眼前に繰り広げられるグローバル化の波動を把握し、地域の痛みと矛盾点、グローバル化の功罪などを発信し、問いかけている。グローバル・イッシュューを村落などの現場からとらえ、調査データを蓄積している。

五 文化摩擦——ぶつかり合い学ぶ

私たちの人材養成プロジェクトは、文化衝突の連続である。遺跡を守る協力は、ただショベルカーで掘ってクレーンで石材を積み直せばよいというものではない。ま

ず何よりも、遺跡を綿密に調査・研究し、

どのような石積みするかなど、土着技術の発掘を含めて考えなければならぬ。現地技術レベルに適合した技術導入から始まり、現場を見ながら徐々に新機器や先端技術を持ち込まねばならない。

現地の人たちから学ぶこともたくさんある。材の影絵芝居や盆踊りを見たり、民話を聞いたり、また、いつ田植えをするか、どうすれば雨水が抜けるか、どの樹木の実にどんな薬効があるかなど、住民に多くのことを教えられる。

結局のところ、人材養成プロジェクトとは「ぶつかり合い学ぶ」ことであると実感するのである。こちらが善意と思っても、カンボジア側では干渉と受け取る場合がある。日本のやり方だけが正しいとは思わないほうがいい。国際協力は相互の信頼関係をいかに構築していくかにかかっている。

遺跡の保存修復は、あくまでも現地の人たちの手によってなされるのが原則である。民族の固有な文化を世界へ向かって説明できる人々は、誰よりも現地に暮らす人々である。人材養成と保存修復事業に關する協力とは、なんとと言ってもそこに暮らす人々を助けることが基本でなければならぬと考えている。

六 なぜ人材養成を始めたか

——鎮魂の気持ちを含めて

私は一九八〇年、内戦の戦塵くすぶる中、アンコール遺跡の破壊状況を調査するためシエムリアップへ出かけた。当時

カンボジアは日本と国交がなく、ベトナム経由で五日間かけてアンコール遺跡にたどり着いた。カンボジアでは一九七〇年から内戦に入り、遺跡は一九九三年までの二十四年間放置されたままであった。さらに、ポル・ポト政権の時代（一九七五～七九年）に遺跡保存官約三十六人が不慮の死に追

いやられた。遺跡を守る人たちがいなくなったのである。

個人的なことを言わせていただければ、一九六一年から私が一緒に遺跡の保存修復の現場で働いていたカンボジア人同僚の保存官（コンサベイター）たちが死んでしまったのである。アンコール遺跡をなんとかしなくてはならないと私を駆り立てるものは、彼らに対する鎮魂の気持ちである。

七 カンボジア人

学位取得者の就職状況

人材養成プロジェクトは、王立芸術大学の再開及び平和の兆しがみえてきた一九九一年三月から始まった。それは、考古発掘調査及び保存修復を指揮できる将来の保存官及び中級レベルの技術をもった幹部技官と石工の養成の三本立てで始まり、現在も続いている。

王立芸術大学考古・建築両学部の学生の中から選抜して研修生として採用し、三年から五年の考古発掘・遺跡修復の現場実習を経たのちに、大学院の学位を取得させることにしている。彼らは、上智大学大学院と東京芸術大学大学院の修士・博士両課程においてアンコール遺跡研究やカンボジア自国研究に取り組み、現地踏査を実施し、英語で学位論文を書いている。すでに二〇〇二年三月、オムラビ氏がカンボジア人として初めての博士号を取得した。

二〇〇四年三月までの成果は、博士号取得者四人、修士号取得者四人である。彼らはカンボジア政府閣僚評議会専門委員、文化芸術省副局長、プノンペン市観光局次長、プノンペン大学助教、王立芸術大学助教及び講師、金沢大学COE研究員などと活躍している。

センターには現在、考古学研修生四人、

建築学研修生六人、石工研修生十四人、ア
ンコール・ワット西参道修復現場作業
員三十人が所属している。この石工養成の
様子がNHK番組の「プロジェクトX」(二
〇〇一年十一月放送)にとりあげられた。

八 幸運にも世紀の大発見

カンボジアの歴史を塗り替える大発掘

考古発掘実習を始めて十一年目にあたる二〇〇一年三月と八月に、偶然にもバン
テアイ・クデイ寺院(十二世紀末ごろ建立)
の境内から二百七十四体の廃仏が発掘さ
れた。

発掘状況から考察すると、それら仏像は
深さが地上から約二メートル、底面一道が
約二メートルの四角の穴に埋められた。地
中であつて約八百年にわたり温度も湿度
も一定であつたため、保存

状況は極めてよく、高貴で美しい尊顔を拝
むことができる。これら仏像の時代は
十一世紀から十三世紀である。アンコール
遺跡の存在が世界に知られてから約百四
十年たつたが、今回のように大量の廃仏が
発見された例はない。

なぜこうした廃仏事件が起こつたの
か? ジャヤバルマン七世(一一八一〜一
二一五年ごろ)は、アンコール王朝の中で
最も多くの仏教寺院を建設し、栄華をつく
りだした偉大な王である。その次の次に即
位したシャヤバルマン八世(一二四三〜一
二九五年)はヒンドゥー教を篤信していた
と思われる。王位継承争いから仏像狩りを
命令したのであろう。

今回の大量の廃仏の発見により、ジャヤ
バルマン八世の統治下でもそれなりに通
常の政治が機能し、国内の繁栄が維持され
ていたことが明らかになってきた。

これらカンボジアの国宝の大発見は、十
一年にわたるカンボジア人保存官候補者

の研修中の出来事であり、彼らの手で発掘
されたことを何よりも喜ぶたい。この発掘
は、フランス極東学院の学者たちが百年か
かって構築してきたアンコール王朝末期
の歴史を塗り替える大発見にもつながつ
たのである。

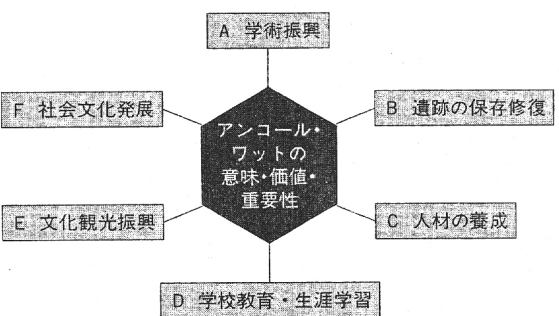
九 遺跡・住民・自然環境

の共存プロジェクト

——ゴミ対策に頭を痛める

私たちは遺跡の保存・修復だけすればよ
いと考えているのではない。遺跡の周辺で
生活している村人たちの村落社会の発展
と伝統文化を再興するプロジェクトを手
伝っている。近隣の森林の自然環境の調査
(植物生態など)、バンテアイ・クデイ寺
院周辺の村落の農業調査や水質検査など
が地道ながら続けられている。シエムリア
ップ州の無形文化財についての調査研究、
民話の採話も一つのプロジェクトである。

遺跡エンジニアリング波及効果予測一覧



特に近隣
のスラ・ス
ラン村の経
済・社会調
査や伝統文
化の調査成
果が出てい
る。これら
は息の長い
調査であり、
その方法論
は「遺跡エ
ンジニアリ
ング」とい

う(上図参照)。例えば、遺跡は地域の文
化資源という新方法論を打ち出している。

しかし、観光振興は簡単ではない。アン
コール遺跡群の周辺の環境悪化、特にホテ
ルから出るゴミ問題への対応が現在大問

題となっている。カンボジア政府と協議し、「アンコール・ワット環境教育プログラム」を二〇〇三年五月に立ち上げた。これは本学の学外共同研究の形で、日本品質保証機構（JQA）、国際規格研究所（ISRI）、品質保証総合研究所（JQAI）の協力を得て実施されている。このプログラムは、アプサラ機構の政府職員、技官、小学校の教員などがその対象となっている。その訓練の後、アプサラ機構は国際スタンダードである「ISO14001 環境マネジメントシステム」を取得することになっている。

十 結論として

——国境のない強固な信頼関係の構築

センターはカンボジアに根づいて九年になるが、その間にカンボジアでは三回の総選挙が実施され、二〇〇一年にはアセアン加盟を果たした。

遺跡の保存修復から始まった私たちの国際協力は、始めから遺跡（文化）と村落（人間）と森林（自然）を三位一体と考え、遺跡だけに目的を絞らずに周辺の村人を巻き込んで展開してきた。

① 遺跡の調査研究・保存修復の事業を通じて、カンボジアの人たちと強固な信頼関係を結んできた。基本的な立場は、「国際協力とは人間の協力」であるという極めて単純なものであり、遺跡保存活動の領域で肌の色、言葉の壁を突き破り、個々人のレベルでどれだけ「国境のない信頼関係」が構築されるかにかかっている。

② 私たちはまず、カンボジアに学ぶべき「知」の遺産があり、そのうえで自らが日本の「知」を語るといふ姿勢を貫いていたことが、カンボジアの人たちの信用度（クレディビリティ）を高めてきたと思われる。現地の法令順守は当然のことである。

③ シアヌーク議長（現国王陛下）は、

「カンボジアが困難に直面していた時期にアンコール遺跡の保護のために手を差し伸べてくれた。私たちは最初に井戸を掘った人を忘れない」と、一九九二年のユネスコとの会議で述べられた。

④ 調査団の名称は英語名 *Sophia Mission Sophia* は上智大学の英語名)といい、一九八〇年代から頻繁に現地に入っているのが、地元で溶け込み、その名前を知らない人はいない。「継続は力なり」と言える。そして人づくりは根気（執念）と時間（継続）、そしてお金であることを実感している。私たちの活動に賛同し、ご寄附くださった皆様に感謝申し上げます。

⑤ だいぶ手前味噌となることをお許しいただきたい。いま思えば上智大学当局の懐の深さに頭が下がる。アンコール・ワットに夢とロマンを託した私の活動を温かく見守り、小さな芽を育ててくださった。こうした大学と同僚の寛大な取り計らいに感謝をささげたい。

（大学時報 No. 296 May 2004）